

児童・生徒の幼児へのかかわり
 ——場面に対する自発反応を手がかりとして——

○岩崎恭枝* 岡野雅子**

(*茨城大, **群馬女子短大)

【目的】 異世代に対する理解は今日的な課題であり、子育ての意義を理解し親の役割を学習することは重要な教育課題の一つである。近年、保育体験学習の充実が求められているが、その目的が十分に達成されるためには、児童・生徒自身の幼児に対する理解の現状を把握することが必要であると考える。本研究は、イラスト画を提示して、それに対する自発反応を手がかりとして、児童・生徒が幼児をどのように捉え、かわろうとしているかについて、発達段階による変化の視点から探った。

【方法】 調査対象者は茨城県の公立の小学4年生219名、中学1年生274名、高校1年生328名、高校3年生284名の計1105名、資料収集時期は2000年11～12月である。提示した場面画はA=幼児数人が遊んでいると風が木に引っかけた、B=男児が自転車で転び泣いている、C=幼児に「一緒に遊ぼうよ」と誘われた、D=隣に座った赤ん坊が腕を触ってきた、の4枚である。

【結果と考察】 ①幼児の困難や失敗場面である図A・図Bには、小学生は「取ってあげる」「助ける」が圧倒的に多く、発達に伴いストレートなプラス回答は減少し躊躇や傍観が増える。②幼児からの友好的接近場面である図Cは「一緒に遊ぶ」が多いものの中・高生では「断る」「逃げる」のマイナス回答が2割ある。図Dは発達段階差が少ないが、小・中生に「そのままにしておく」のプラス・マイナス回答が比較的多い。③図B・C・Dのプラス回答は女子に多く、図Cでは中・高男子のマイナス回答は3割を占める。④したがって、幼児からの直接的なかかわりの要請には戸惑いや一部に拒否的反応も見られ、発達に伴い幼児とのかかわりに多少の距離感を持つようになることが窺われ、特に男子生徒の幼児への親和性の育成が課題といえよう。